

巨樹・巨木シリーズ35 愛知県-3

細田木材工業株式会社

顧問 細田 安 治

愛知県の巨樹・巨木シリーズはスギとクスのオンパレードを続けたが、まだまだ奥深く、今号も愛知県の巨樹である。まだまだ続きそうである。

写真番号1 樹番号28 日吉神社の大クス

樹齢伝承800年以上、樹周10.4m、樹高27m 愛知県
新城市日吉字宮ノ腰 新城市指定天然記念物

伝説によれば、その昔、村中が大火事に見舞われたとき、日吉神社の大クスに燃え移り、七日七晩燃え続けて村を守った。村ではこの大クスのお蔭で村が丸焼けにならずに助かった、という。以来、村を助けたご神木として地域の人々に大切に祀られている。

＜筆者のつぶやき＞

この大クスは見るからに大自然の猛威と闘い、自身は凄まじいほどボロボロになりながら神社を、そして地域を守ってきたことがよくわかる。このような傷だらけの樹相(?)で枯れない、つまり生存しているのが不思議なほど痛めつけられている。このシリーズを書き出してから数多くの巨樹を見てきたが、これほどまでに痛めつけられた巨樹を見るのは初めてだ。

昔から「大木・大樹のおかげで火事が燃え広がらずに済んだ」など、大木・大樹が火除けの神さまとなる言い伝えは度々耳にする話だ。地震、雷、火事、オヤジと言われ、火事が怖い災害として恐れられていることは、今も昔も変わらない。特に我々「木材や」「木材業界」にとって、「火事は一番身近な怖い災害」、として改めて気を引き締めなければならないと思った次第である。



写真1 日吉神社の大クス

写真番号2 樹番号29 大和の大イチョウ

樹齢120年、樹冠幅約30m、樹高25m 愛知県豊川市豊津割町

*豊川市ホームページなどを参照して。

このイチョウは約100年前に尋常小学校の記念樹としてまず雌のイチョウが植えられ、後に雄のイチョ



写真2 大和の大イチョウ

ウが植えられたという。このため2本は「大和の夫婦イチョウ」と呼ばれている。

遠くから見るとこのイチョウの姿は「打ち出の小づち」のように見え、秋の終わりに黄色に色づくころはとても美しいという。

<筆者つぶやき>

地上から数m上がったところから枝が水平方向に10m以上も広がっている。本来イチョウの木は背丈が高く、胴回りもしっかりしていることが多い。しかしこの大イチョウは背が低く、枝を千手観音のように四方八方に広げている。小枝は下向きにしだれていて、まるで仏像を覆い守っているかのようだ。

実に珍しいイチョウ。なぜこのような姿になったか、理由を知りたいぐらいだ。イチョウの珍木としてご紹介した。

写真番号3 樹番号30 ^{とが}砥鹿神社のケヤキ

樹齢推定600年、樹周9.3m、樹高30m 愛知県豊川市一宮町西垣内 愛知県天然記念物

*砥鹿神社ホームページなどを参照して。

愛知県豊川市一宮町にある三河國一之宮 砥鹿神社の大ケヤキは、県下有数の巨木だ。神社東側斜面下の道路沿いに聳え立ち、下から見上げると巨木の迫力に圧倒される。

この大ケヤキ、実際は砥鹿神社の東側、少し外れた道路沿いの斜面に立っている。神社の境内からは大ケヤキの上部だけ見えるだけだ。全体をしっかりと見るには、この神社の外の東側の道路から見るしかない。

このケヤキは古くから「みたらいのケヤキ」とも呼ばれている。

「みたらい(御手洗)」とは、お詣り前に身を清める、「手水場で手を洗い、うがいをして身を清める」ことを言う。かつてこのケヤキの根元から神泉が湧いていたといわれるのがこの「みたらいのケヤキ」の名の由来らしい。

<筆者のつぶやき>

ここで、武将の活躍と神社、そして巨樹との関係について筆者の推察を述べる。

尾張、三河、美濃（岐阜県）三国は、日本の三傑と言われる織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の出身地であり、天下の覇権を争った地でもある。室町幕府の戦国時代から織田信長の天下統一により安土城を築いた安土・桃山時代、豊臣秀吉太閤殿下の時代、徳川家康の江戸時代と続く。この三国は「武家政治の始まりの地」ともいえる。

生死を賭けた戦に「もののふ（主君のもと、戦場で戦う武人）」「武士」は多数の領民、配下の家来の命を預かり、戦いに明け暮れている。彼らは、常に神頼みの日々を送り、神を信じ、神が祀られている神社を大切にし、地元はもとより行軍のさなかでも神社を見かければ立ち寄って戦勝を祈願していたという。

武将たちが神社にすぎり、大切にすることはすなわち、神社にある樹木をも大切にすることになる。神社は武将のバックアップを受けて大きくなり、樹木も成長する。時を経るごとに神社には信仰が集まるため栄え、樹木も大きく巨樹になっていく。このような訳で、この地には神社が多く、また巨樹も多いのではないだろうか。

写真番号 4 樹番号32 牛久保のナギ

樹齢推定300年以上、樹周3.5m、樹高約20m 愛知県豊川市下長山町西道貝津

国指定天然記念物

*ウィキペディア情報より。

ナギはマキ科ナギ属の常緑高木で、比較的温暖な気候を好むため、日本国内での主な自生地は四国および南九州以南の地域であり、人為的に植樹されたものを除き、自然状態で自生するナギの個体は関東地方以北にはほとんど存在しない。

この牛久保のナギは、自生の北限に近い緯度にあ



写真 3 砥鹿神社のケヤキ



写真 4 牛久保のナギ

るナギとしては著しく大きく成長したものであることから、1938年(昭和13年)12月14日に国の天然記念物に指定された。

<筆者のつぶやき>

*ネット情報などを参照して。

この牛久保のナギは、日本三大稲荷の一つとされる豊川稲荷に近く、豊川市の南方の熊野神社境内にある。しかし、1897年(明治30年)に開業した豊橋駅 - 豊川駅間の建設に際し、現在のJR東海飯田線の線路が、この熊野神社の境内を南西から北東方向へ横切るように敷設されたため、社殿のある線路北西側の境内とは分断されてしまった。したがって一見しただけでは本樹が神社境内に生育しているようには見えない。熊野神社の境内が、飛び地のようになってしまったからである。

<筆者のつぶやき>

一鉄道会社の都合により地域の鎮守様である神社の境内が分断された。このような暴挙がまかり通っているのか?そこで当時の時代背景を調べてみた。

明治30年から10年間(1897年～1907年)は産業優先、軍事増強の時代であった。即ち、日清戦争勝利、国営八幡製鉄所操業開始による重工業化、対ロシアのためイギリスと日英同盟締結、仕上げは日露戦争に勝利などなど、日本は戦争に勝ち、重工業の振興、北海道開拓本格化と、まさに近代化への道をまっしぐらに進んだのが、明治30年代だったのである。

このため、神社は軽視され、一私企業である鉄道会社の線路施設が優先されたのだろう。^{まつり}祀り、^{あがめ}崇め、^{おそ}畏れ、ご利益を賜る神様に対して目をつぶって脇に置き、鉄道線路を優先した。この時代では、許されたことなのか。後世の我々から見れば「この神社の境内を横切る事業は」およそ出来ることではない。

このような扱いを受けたが、ナギの木は結果的に国の天然記念物に指定された、とある。「国も罪滅^{おそ}びしか・・・」それはさておき本題に戻る。

表記の通りこの木はナギとしては巨大なもので、地上から約4メートルのところで2つの支幹に分かれている。樹齢300年以上とされ、樹勢はなお盛んである。

*ネット情報を参照して。

ナギの木は和歌山県の熊野三山を総本社とする熊野神社系の神社境内に植栽されていることが多く、雌雄異株であるため、雄株と雌株が対になって参道の両側に植栽されることもある。牛久保のナギは雄木(雄株)であり、前述した飯田線の線路を挟んで北西側にある熊野神社社殿の右手に雌木(雌株)があって、毎年秋になると濃い藍色の実が結実する。

ナギの葉は光沢のある細長い楕円形をしており、多数の葉脈(平行脈)があつて、見た目からは想像し難いが、簡単に裂くことができないことから別名「ベンケイナカセ(弁慶泣かせ)」とも呼ばれる。裂けにくい特徴から夫婦の縁が切れないことを願うお守りに入れられたり、かつては嫁入り道具の家具に彫刻されたりした。

葉の先端はにぶく尖っていて、長さは約6センチ、幅は2センチほどで、葉の形状の印象から広葉樹のように見えるが針葉樹である。ナギの木とは、なんと様々な生育地、育った環境、用途や役割、そして伝説も持っている「面白みがある懐^{ふところ}の深い木」ではないか。続く